

横濱市小児科医会ニュース



No. 15 1997年10月1日

時 言

市小児科医会 顧問 五十嵐 鐵 馬

平成元年に20年の歴史がある市小児科連合懇話会を発展的解消し、新たに市小児科医会として発足以来、不肖、会長として8年に亘って勤めさせていただきました。此の間、幹事諸先生を始め会員各位の御協力により、従来年1回の研修と懇親会であったものを、医会として組織的改革を行い、医師会や行政に対し小児科医の意向を反映させ得るものに改変出来ました事は御同慶の至りです。一応の目標に達しましたし、同じポストに長居することは良くないという信念に基づいて本年4月で顧問に退き、若い世代にお任せすることに致しました。此の間、我ながら些か強引の嫌いがあったにも拘らず御協力いただいた関係諸先生に感謝致します。さて少子化時代が進み、小児科医の前途は色々と取沙汰されています。顧みますと私が医師になった昭和30年頃から医療の世界の進展は目覚ましいものがあり、ベビーブームも幸いして小児科医としては戦前の小児専門医の良き時代とは別の意味で良い時代を過ごしてきたと思います。然し昨今は色々な要因から小児科医が厳しい場を迎えていることは衆知の通りです。栄枯盛衰は世の習いですが、最近の小児科入局者の推移をみていますと、もうそろそろ底の感がします。小児医療費の不当な扱いは昨今は乳幼児医療費の無料化、定額制の導入、入院新生児医療費の改善等々、徐々に改善の兆がみえてきています。予防接種の普及や抗生剤等により感染症の制圧は昔に比べて楽になりましたが、昨今は感染症の復活が懸念されており、一方アレルギー性疾患、小児成人病、心身症、神経症を含めた心の問題等は増加傾向にあります。昨今出生前小児保健指導や思春期外来も云々されていますが、特に成長発達の段階から診てゆく小児科医は思春期は勿論、病気によっては生涯的に診る方が良い場合もあります。今後の小児科医の進路としては、頓に新しい予防医学を含めた小児保健の啓蒙分野、教育指導分野もあります。また昨今問題の多い学校医制度も今や抜本的改革を必要とする時代になっていると思います。現在学校医も感染症より小児成人病予防や心の問題への対応を求められています。勿論努力しなければなりません。限界があると思います。新しい制度の進展によっては小児科医の進路の一つかと考えます。子供を大切にしない国は亡びます。聡明な日本人はそのような愚行はしないと思いますので、小児科医の将来展望は今後は次第に明るくなると信じています。

二つの提言

(13)

食中毒

毒素性大腸菌O-25による 集団食中毒とその後

神奈川県 鈴木 與 巳

堺市のO-157の患者さんが3,791人に上ってしまったことを新聞が報じていた折も折、昨年7月17日の朝9時半、校医をしている神大寺小の長房校長から電話があった。それが病原性大腸菌O-25による集団食中毒の事件の始まりでした。学校の対応も冷静で、行政の対応も迅速でした。私も直ちに区会長に実情を報告し、区医師会は行政と連絡をとり昼には地域としての対応策を整えました。学校・教育委員会・衛生局・保健所・区医師会の連携は特別の齟齬もなく略円滑にいったと思っています。唯記者発表とともに、周辺の学校や保育園（給食を続けていた）にも、緊急の情報提供が有れば関係者には有益だったと思います。

その後五十嵐前会長より藤塚小校医の関先生と共同で、市の集談会で発表するよう指示されました。この集団食中毒の患者さんは健康センターの給付の対象となり、新学期には4校で医療機関受診者の名簿が作成されていました。それで医療機関へのアンケート調査が可能になり、2校の校医先生始め受診機関の先生方には大変な御面倒をおかけ致しました。

4小学校の有症者は722名に上り、受診者は439名でした。藤塚小と仏向小の職員の有症者率は76%と高率でした。糞便検査でO-25陽性率は学童の発症者では3校平均で41%、非発症者（健康保菌者）では3校平均で15%

でした。（市衛研の検査結果）

教育委員会への患者発生の報告は、藤塚・神大寺・万騎が原と夫々16, 17, 18日であり、恰も3校での患者発生の日時が1日づつずれた様な印象を与えていましたので、その点特に注意しました。藤塚小は16日昼及び夜が発症者の最多日時で、神大寺小は16日夜及び17日昼が最多日時でした。万騎が原は17日昼夜です。藤塚小は神大寺小より数時間早い発症者が多く、万騎が原小は神大寺小より数時間遅いという結果でした。喫食後24時間から60時間までの間の発症者が大多数で略同時発生といえると考えました。尚藤塚小の場合の潜伏時間のやや短いこと、下痢回数が多いこと、職員の発症率の高いこと等注目するところです。

毒素性大腸菌O-25による集団食中毒の初めての報告は昭和58年（1983年）9月岡山市に於けるもので、患者数は712名でした。その後の報告は平成5年（1993年）大阪府下の結婚式場に於いてO-169 : H-41との混合感染によるものがあります。

昨年末のO-157感染者の全国的な異常発生は、病原微生物の都市社会に於ける侵淫状況を垣間見せてくれている様です。感染症の重要性が言われる様になりましたが、私には昭和30年代の感染症患者の悲惨が鮮明に記憶に残っています。新興・再興感染症、病原微生物の逆襲といかに戦うかが、これからの大きな課題になるのでしょうか。しかし、この傾向はMRSAの出現、AIDSの出現等で確実に進行してきたわけであります。文明社会の大規模な自然破壊は微生物の生態系を破壊して、本来の宿主から離れて異種性感染を惹起せしめてしまうのでしょうか。プリオン病（恐牛病）も本来牛の仔が飲むべき牛乳を、人間が取り上げてしまって、牛の仔には離乳食〔羊の肉（羊の病気）〕を与えた為に異種性感染をひき起こしてしまった様です。

今年のO-157感染症の発生状況を昨年と比べてみても、手洗い、清潔などの基本的衛生

手段が現在でも如何に大切であることを示しています。或る中国人が言われたことに、「日本語の“きれい”は、美しいことと清潔という2つの意味を併せ持っている素晴らしい言葉です」と話された。一見美しく見える都市社会が真に清潔であるかどうか、食中毒対策はそこを厳しく問われているのではないのでしょうか。

予防三原則を徹底させよう

旭区 小林 幹子

「今に感染症なんか、なくなって、小児科医はする事がなくなるよ」と言われながら、小児科学教室に入局したのが、40年前だった。(病気より先に子供がいなくなるとは夢にも思わなかったが、此れは別の問題として)確かに、新薬が次々に開発され、優秀なワクチンの開発によって、昔ながらの疾患はみられなくなった。

しかしイタチゴッコとはよく言ったもので疾患も次々と新手が出て、恐ろしい感染症が顔を出して来た。

まして、軽く考えられていた食中毒にこれ程ふり廻されるとは！40年前の予言者の顔が見たい。

二次感染も起こすO-157は、我が国では、7年前、埼玉県で井戸水が原因で集団発生し、死者も出したのが最初で、それ以来、毎年、全国的に散発していたが、不明にも対岸の火事ではなかった。

しかし、昨年は岡山県でも集団発生し、マスコミに大きくとり上げられ、そして遂に、我が横浜にも足許に火がついた。小児科医の緊急集会では治療法も確定しない現実に、いらだちを、不安を、誰もが抱いた。

何回の講演会、研修会に足を運んだことか。私の処にも、1日2行の軟便程度で、便培養

を希望して、母親が来院するなど、此の春から夏にかけての、O-157の波紋は大きかった。

出血性腸炎のみならず、脳症やHUSをひき起こして、手厚い治療の甲斐もなく患児が死亡した例など報道されれば、感染即ち発病と思いきこんでいる人がパニックになっても不思議ではない。

マスコミにとりあげられてすっかり有名になったO-157だが、食中毒は、件数、患者数共に、サルモネラ菌によるものの方が多いし、O-157以外の病原性大腸菌、腸炎ビブリオ、カンピロバクター、ボツリヌス菌、セレウス菌、ウェルシュ菌、黄色ブドウ球菌その他、自然毒(ふぐ、きのこ類)化学物質によるもの、原因不明のものなど多種多様である。

一般に軽く考えられがちだった食中毒にしゃべ返しされた今、関心を集めている今、予防に注意を払うよう呼びかける好機だと思う。

つい最近まで、如何にも鮮度の悪そうな野菜が置かれていたコンビニエンスストアに、今は野菜コーナーさえない。替りに、きざんだキャベツのパックをはじめ、出来合いのお総菜パック、レンジで2分の白い御飯、袋入りのみそ汁。まな板も、包丁もなく、ハサミだけの家庭(?)があるというのも納得がいく。

生活様式も人の考え方も多様化している。外食産業も盛んである。流通が世界的規模となった今、食材が何処から、どの様な経路で来たか知るのは至難であるが、せめて出来る事からはじめよう。

気にしはじめると危険な食品であふれているのが悲しいが、知識を持てば、弱い立場の乳幼児をある程度守ることは出来る。

一般家庭に具体的に、食品の購入の仕方、保存法、調理の下準備と仕方、残りものの始末(保存も含めて)の過程で食中毒菌の入りこむ隙を与えないこと、「菌をつけない」「ふやさない」「殺す」の三原則を、そして特に乳幼児には、必ず火を通した食べ物を、清潔な手で与えて欲しいと訴えつづけたい。

医会通信

本年度より前五十嵐会長の後を引き継ぎました。前会長と同年齢で決して若くはありませんが、次の世代をふまえてこの役を引き受けさせて頂きました。又何も解らず不慣れなので役員、幹事の方々には全員そのまま残って頂く様お願いし、お引き受け下さいまして有り難うございます。特に副会長には、有本、野崎、渡辺、庶務に矢崎、大西、会計に小林、広報に富田、真坂、学術に八木、向山の素晴らしい先生方をお願い出来ました。どうぞ皆様宜しくお祈りします。

元来、この小児科医会は、最初、数地区にあった小児科懇話会より市連合懇話会となり、発展して今日の様な、組織だった横浜市医師会の中での横浜市小児科医会になったのだと、諸先輩方からお聞きしております。それ故これからも尚一層、各地区医会の細かい情報を頂き、連絡を密にして行きたいと考えております。

現在、年合計4回、総会と産婦人科・小児科研究会の各学術講演会を開き、専門知識の増進として活発な活動を行っています。また更に会員に選

元出来るように、皆様にお役に立つ“お知らせ”や、出版物の刊行が出来るようにしたいと考えております。

診療報酬改正、母子保健法改正に加えて更に9月からの詳細が未だはっきりしない薬価改正も加わり、出生率は1.43と世界最低、平均寿命は世界最高となり、我々小児科医にとって、ますます苦しい社会情勢となって来ました。我々は一人一人に時間をかけた、密度の濃い診療を行う事と、今迄の疾病指向型から健康指向型への転換を図って、健康診断、予防注射、学校医活動などに、力を入れなければならない事は皆様よくご存知のことです。

これからの医療改革の為にも時の流れに流れっぱなしでない、フレッシュな若い力がこの小児科医会にも是非必要だと考えられますので、どしどし先生方のご意見をお聞かせください。

尚、医会ニュースNo.15の“二つの提言”は、今年TVKでお話しなされた、小林先生と昨年来O-25の集団発生で活躍なされている、鈴木先生にお願いしました。これが皆様のお手元に届く時にも新聞面を賑わしているかは解りませんが、医会の先生方の最近活躍された食中毒の話題ですので、是非お読みください。

(会長 三澤 孔明)

第4回横浜市産婦人科小児科研究会のご案内

平成8年に第1回研究会が開かれ、今回で4回になります。近年の少産少子に少しでも明るい希望が持てるよう、両科が協力し、会の更なる発展を願っています。

世界的なエイズの流行が進む中で、わが国でも最近発見される新感染者の過半数が20歳台になり、しかも異性間感染が主になっています。

このことは、若年者に対するエイズの正しい知識の普及が急務であります。夫婦間の感染が増加してくると、HIVの母子感染が心配され、我々医療現場でもそれに備えた具体的な対策が求められます。

その為、今回のテーマにHIVの母子感染を取り上げましたのでご案内申し上げます。多数のご参加を期待しております。

★日 時 平成9年12月12日(金) 午後7時～9時

★場 所 横浜市健康福祉総合センター 4Fホール

★演 題 「HIVの母子感染について」

★講 師 赤城 邦彦 先生(県立こども医療センター感染免疫科部長)

(有本 泰造)

医会だより

北部小児科医会

8月27日、青葉区医師会館で北部小児科医会総会が開かれた。緑、青葉、都筑の3区保健所長の出席を得て、31名と盛会であった。

議題は、保健所乳幼児健診出動医師の割当て、従来、会員の協力で行っていたが、今回から都筑区の事情で、区内の医師で割当てを決めることになり、青葉と緑の2区は今迄通り北部小児科医会の全員で協力することになった。乳幼児健診という特殊性より、出来るだけ小児科医が中心となっていく方がよいと思う。

次に今年の11月より都筑区医師会館にオープン予定の横浜市北部夜間急病センターについて、出来るだけ多くの会員が参加協力出来る様熱心な討論がなされた。関係者の御尽力のお陰で懸念されたマンパワーの確保も、見通しが徐々について来ているとの事であった。

平成9年度の行事及びその予定は次の通りである。

平成9年度事業計画

平成9年

5月10日：役員会

5月14日：青葉区医師会学術・学校医・公衆衛生部・北部小児科医会共催 講演会
「最近の結核検診の考え方」

ー乳幼児・小中学校のツ反応・BCGを中心にしてー

結核予防会結核研究所
所長 森 亨 先生

6月12日：青葉区小児科医会学術講演会
「小児の滲出性中耳炎」

聖マリアンナ医大耳鼻科助教授
高橋 姿 先生

8月27日：総会、保健所乳幼児健診出動割当、役員選出の件等

10月9日：第3回学術講演会（当番 青葉区）
「こどもの心の健康」

平成10年

2月：例会、保健所乳幼児健診出動割当等

3月：第13回乳幼児健診に関する懇談会

尚、各区小児科医会の実情は機会を見てそれぞれの会長にお願いしたい。

（会長 有本 泰造）

東部小児科医会

去る5月に開かれた東部小児科医会総会で、会員の皆様からの御推薦を賜り会長の任を負う事になりました。まだ開業して4年にも満たず、年齢的にも若輩の身でありながら、伝統ある東部小児科医会をまとめるのは甚だおこがましいと思い固辞したのですが、佐久間前会長や会計の三保先生を初め幹事の方々の温かい励ましを受け、しばらくがんばってみる事に致しましたので、どうぞ宜しくお願い致します。

さて、着任してまず会員の先生方の会員名簿の整理と年会費の徴収方法に取り組みました。そして港北区と鶴見区の医師会に各々事務局を置き、通知、案内の徹底を図りました。勉強会も計画的に行うこととし、5月には県立厚木病院泌尿器科医長岩室紳也先生をお招きして、小児の包茎とAIDSについて最新の知識を講演して頂きました。岩室先生は国際AIDS会議でも活躍され、マスコミにもひっぱりだこの若手のホープで、医学的な話だけでなくコンドームの正しいはめ方を秘宝の棒を使って実演して下さるなど聴衆も度肝をぬかれるお話ぶり、老若男女を問わず皆深い感銘を受けました。今後思春期医学は小児科学の中でも益々重要な位置を占めることになるでしょう。そして7月には埼玉県立小児医療センター副院長城宏輔先生をお招きして、最近のウイルス細菌感染症の話題と題して、有名な埼玉の死亡例から最新のO-157の情報、海外学会報告に至るまで丁寧に御講演下さり充実したひとときを過ごす事ができました。この会には近隣の青葉・都筑区の先生方も多数出席下さり、相互の連絡と親睦の和を広げる事ができ大好評のうちに散会となりました。

今後も横浜労災病院小児科・郡部長に顧問として引き続き御支援をお願いし、会員と中核病院の病診連携を益々緊密にして、港北、鶴見の小児科医会の地位の確立とレベルの向上に少しでもお役に立てればと思っております。

（会長 中野 康伸）

西部小児科懇話会

前号掲載以降の例会は以下の様に開催されました(第190回以外は市民病院講堂)。

第188回, 平成9年3月27日(木), 「遺伝子治療」
講演: 国立小児病院先天異常研究室長・奥山虎之先生

かねて会員からの希望が多かった遺伝子治療について, 米国で長年基礎的研究に取り組みされていた奥山先生にお話をいただきました。最も印象的であったのは, 遺伝子治療は種々の技術的困難性のため, 現時点では必ずしも夢の治療法ではなく, 将来的展望も明るいとは限らないという奥山先生の率直な御意見でした。

第189回, 平成9年5月22日(木), 「再びO-157とHUS」, 症例呈示: 市民病院・長谷川絵美先生, 三浦大先生, 講演: 都立清瀬小児病院腎内科医長・本田雅敬先生

昨年7月下旬に臨時で病原性大腸菌に関する懇話会を開催しましたが(第184回), 本年も早々からO-157は各地で被害をもたらし, 特に横浜市では発生が目立った為, 同一テーマで例会を持ちました。市民病院でも出血性腸炎兄弟例とHUS2例を経験しました。特にHUSに関しては, 病態生理を無視し, 未だ確立されておらず, また病児に過剰な負担をかける治療も行われている様です。この様な点に鑑み, 豊富な臨床経験を持つ本田先生から, HUSに関する正しい把握と治療を解説していただきました。

第190回, 平成9年7月17日(木), 「小児喘息」,
講演: 市民病院医長・尾崎亮先生

喘息に関する最近のトピックとしては, やはりフェノテロールMDIによる喘息死が第一に挙げられると思います。その他, 特に小児喘息の病態生理, 治療法等につき, 内外の文献を整理して, 市民病院で喘息外来を担当している尾崎先生にお話していただきました。講演終了後, 納涼会に移り和やかな懇親が続きました。

(横浜市立市民病院小児科 清水 節)

中区小児科医会

中区の小児科医会のメンバーは, 勤務医, 開業医が半々で, 研究会では勉学にいそしみながら, 和気藹々と楽しくやっております。

157回の研究会では, 『国境なき医師団』の日本事務局長ドミニク・レギュイエ氏に講演をして頂きました。

『国境なき医師団』??? 一何となく気になる存在だったのですが, どんな活動をしているのか, スライドを使って講演して下さいました。沢山の国々の名前, そして, 民族。それが, 国境を越えて移動するわけで, 国の名前も変わってしまう今日では, 政治的背景, 民族感情などを的確に, 又, 公正に理解することは, 至難の技です。(私などは, 国の名前の半分も分かりませんでした。)だからこそ, 『国境なき医師団』の活動が, 必要とされるのでしょうか。彼らの活動は, 多岐にわたり, 「阪神大震災」では, いち早く救援隊を送り, 現在も活動中であるとか, ストリートチルドレンの救済とか, 「眠り病」の研究なども, 現地で長期的に行っているとのこと。私達の日常の診療からは, とても遠い存在のようで, でも, 医の原点に, 引き寄せられるような, そんな魅力を感じさせられたのは私だけでしょうか。(ドミニク・レギュイエ氏も, とても魅力的な方でした。)保険点数に縛られたなかで医療をしている私は, 1日50円の寄付を申し込みましたが, 自分のなかの国境が, 少しは広がるでしょうか。

(大本 赫子)

南部小児科医会

本年度は役員的大幅な交替がありました。新役員の詳細は後述しますが, ここで, 当医会の歴史を紹介します。

平成2年に浅井先生が会長につかれ, 地元基幹病院である県立衛生看護付属病院及び済生会南部病院小児科と当南部小児科医会との連携・協力態勢を築くなど, 組織固めをされました。続いて平成6年より3年間, 矢崎先生が会長を引き継がれ, 年に4回講演会を定期的に関く様になり, 又, 上

記2病院主催の小児科勉強会も当医会との正式な共催となりました。それらは、日医生涯教育・日本小児科学会の認定資格を得る会になっています。また、会員相互の親睦を図るべく新年会を毎年もつようになり、小児医療情勢をめぐる諸問題にも目を向けるなど、学術以外のテーマもとりあげています。新年会会場の予約時間を延長するほどの盛り上がりでした。

本年6月総会がもたれ、八木先生が新会長となりました。当日県立こども医療センター皮膚科馬場先生を講師としてお招きし、「ちょっとめずらしい小児の皮膚疾患」というテーマで講演会をもちました。横浜市主催のO-157の講習会と運悪く重なりましたが、半数以上の会員が出席し盛会となりました。

平成9年度新役員一覧	
会 長	八木 禧昭(港南区)
副 会 長	小島 碩哉(港南区)
名誉会長	矢崎 茂義(磯子区)
顧 問	浅井 綾子(南区)
	三沢 孔明(南区)
	森 哲夫(南部病院)
	豊田 茂(付属病院)
監 事	宇南山曙男(南区)
	永持 和一(港南区)
幹 事	西谷 修(南区)
	藤田 伸二(磯子区)
	斎藤 綾子(磯子区)

本年9月には豊田茂先生が会頭を勤められます。日本小児栄養消化器病学会が横浜で催され、本会も出来る限り協力・参加して参ります。八木会長のもと活発に活動を続けたいと思います。

(斎藤 綾子)

南西部小児科医会だより

◎横浜小児木曜会(木曜会)

毎月第3木曜日に国際親善総合病院小児科に於いて開催されて居る。(19:00~20:30)

① 4月10日(木)

演題 小児の膠原病-新しい考え方

横浜市大福浦病院 横田 俊平先生

② 5月15日(木)

演題 小児の肝疾患-最近のトピックス

順伸クリニック院長 入戸野 博先生

③ 6月19日(木)

演題 小児の胃十二指腸疾患

県衛生看護専門学校附属病院小児科

豊田 茂先生

◎第6回小児疾患地域談話会

日時 7月30日(水) (19:00~21:00)

場所 横浜栄共済病院

開業医よりの紹介患者の内、特に問題となった症例の報告として、

a) 11歳女児

主症状:発熱・白血球減少・血小板減少・肝脾腫大・頸部リンパ腺腫大・口唇の皮疹・口内炎、横浜栄共済病院での検査の後、横浜市大病院での諸検査の結果、血球貧食症候群と診断された珍しい症例。

b) 発熱が遅延した伝染性単核球症(2歳男児)

c) 生後3ヶ月で発症したGBS細菌性髄膜炎

d) 痙攣発作にて発症し、当初多発性硬化症と診断されたが、諸検査の結果、脳底動脈領域の梗塞巣が発見された13歳男児。

e) 出生後水痘を発生した女児

以上の報告の後、

梶ヶ谷保彦先生から「小児における輸血療法の説明と同意」に関して、本邦に於けるUp to dateな状況も含めて、詳細な報告がありましたが、紙面の都合により、内容は割愛致します。

(会長 内山 英男)

金沢小児科医会だより

毎年、春と秋に学術講演会と症例検討会を開催していますが、今年度は都合でまだ実施していません。昨年度の報告もまだでしたので下記に示します。

H8.3.12(火)症例検討会、於 南共済病院、出席者22人。

演題1)発作性寒冷血色素尿症の1例。2)乳房腫大を主訴に来院した6歳女児。3)高校生喘

===== 庶務報告 =====

息死の2例—思春期喘息死の現状と問題点—。4) 中耳炎を放置し乳突蜂巣炎に進行した1例。5) 当院における顔面神経マヒの6例。6) 血漿交換が有効であった川崎病の1例。以上横浜南共済病院小児科スタッフ。7) かぜ症候群における抗生物質使用の時期。大久保医院の大久保慎一先生。活発な質疑応答があって時間超過のため山田卓男先生の学校検尿の話は次回へ延期してもらった。

H8.12.9(月) 学術講演会、於 金沢区三師会館。

演題1) 頸部リンパ腺腫大について—血液腫瘍性疾患を中心に—。2) 小児白血病の治療と予後の変遷。30余年間のお仕事の集大成をわかり易く説明していただいた。最近の小児白血病の治療の進歩、特に骨髓移植による成果には改めて驚嘆したと同時に、会場の同医局卒業生から、新入医局員の頃、白血病の患者を受持ち、無我夢中で治療した日々なこと、ベッドサイドから離れられない状態が続き、悲しく見送った児らのこと等に思いを馳せると感慨深いものがあるとの発言に同感したのは私だけではなかったようだ。

松山教授は本年4月に退官なさいましたが、この紙面をお借りして、長い間、本当に御苦勞さまでした。そしてありがとうございますと申し述べさせていただけます。

(会長 黒住 浩子)

===== 会計報告 =====

平成9年度会計(中間)報告

(H9.9.1現在)

現在高	2,240,737
内訳 現金	67,971
郵便貯金	972,191
貯金センター	740,000
医師信用組合	460,575

9/1現在での会費納入(9年度)は232名です。

(会計 小林 幹子)

1 総会・研修会

H9.4.24 於 ブリーズベイホテル
講師 水原 春郎先生

2 常任幹事会

H9.5.14 於 市医会議室
H9.9.5 於 市健康福祉総合センター
10F オアシス

3 その他の会合

H9.6.24 第3回産婦人科・小児科研究会
於 市健康福祉総合センター
4F ホール

講師 ども医療センター 後藤 彰子先生

4 広報活動

H9.4.1 小児科医会ニュース第14号発行

5 新役員

会長 三澤 孔明

副会長 有本泰造(総会・乳児保健・医療保険・
行政・産小研)

〃 野崎正之(会計・各小委員会・行政)

〃 渡辺昭彦(学術・予防接種・学校医
部会・乳児保健)

庶務 矢崎 茂義

〃 大西 三郎

会計 小林 幹子

会報 富田 一彦

〃 真坂 孝二

学術 八木 禎昭

〃 向山 秀樹

(庶務 大西 三郎)

1997年10月1日発行
横浜市小児科医会ニュースNo.15

題字 五十嵐鐵馬

発行人 横浜市小児科医会

代表 三澤 孔明

編集:横浜市小児科医会広報部

事務局:〒231 中区麦田町4-99

Tel 622-8676(野崎方)